

# 大震災から 6年 福島で生きる

▽3

福島県東部の阿武隈高地に開けた飯舘村。農家の納屋で田園の風景とは不釣り合いな装置が稼働する。「ガイガーミューラー計数管式放射線モニタ―」。東京電力福島第1原子力発電所事故の8カ月後から空間放射線量を測り続けている。

モニタ―を設置したのは農家の菅野宗夫さん(66)。「原発を造ったのは人間。同じ人間の知恵で地域を再生できるはずだ。実験場になってもいい」。放射線、生物学、医学……。各地から専門

## 放射線 数値で見せる



納屋に放射線モニターを設置し、測定を続ける農家の菅野さん(福島県飯舘村)

家が集まり、住民と協力しながら放射線に関する研究を進める。

東京大大学院の溝口勝教授(57)は2011年6月から村に通い、自身が開発した器具で土壌中の放射性セシウムの移動の有無を検証する。昨年、東大農学部(東京・文京)に、村内100

力所の田んぼで住民らが採取した土壌のサンプルを郵送、放射性セシウムの濃度を測る取り組みを始めた。「住民が加わることで研究と地域の再生が結びつく」

県内の避難指示は帰還困難区域を除き、4月までに解除される見通しだが、見えない放射線への

## 地域再生へ不安除く

漠とした不安はぬぐいきれない。菅野さんは「見えないから不安を生み、捉え方も人によって変わってしまう。データで可視化して判断材料にすれば、不安の領域を狭められる」と強調する。

原発から流れ出た高濃度の汚染水で、沿岸の漁場も壊滅的なダメージを受けた。消費者の懸念は根強く、福島沖での漁業は今も試験操業にとどまる。水面下の放射性物質はどう変化しているのか。県水産試験場は6年間、魚介類に含まれるセシウムの測定を続ける。

これまで調べた検体数は4万2369。事故直後は1キログラムあたり数万超という高濃度が検出されたが、15年4月以降の1万6347検体は全て基準値を下回っている。濃度の低下は魚の世代交代が最大の要因だ。沿岸で採れるカレイなどの寿命はおおむね5年程度。体内のセシウムを年齢別に解析すると、事故後生まれの世代で濃度が顕著に下がっていた。

当初、魚が取り込んだセシウムの半減期は40日といわれた。魚種によってはその通りに低下している。交わらず「新たな海の汚染があるのではないか」と疑念が生じたこともある。飼育試験で成長の遅い魚は濃度低下も遅くなることを解明した。水産試験場の根本芳春・漁場環境部長(48)は「研究を通じて、早期の本格操業開始を後押ししたい」と話している。

### 原発事故と健康 関係探る

東京電力福島第1原発事故を受け、福島県は2011年6月、県立医大に委託し、全県民約200万人を対象にした健康調査を始めた。

事故直後の被曝(ひばく)線量を推定。事故当時18歳以下だった県民の甲状腺がんの検査や、事故が与えるストレスなどに関する調査にも取り組む。甲状腺検査は14年

度から2巡目を実施し、昨年12月末までに145人が最終的に甲状腺がんと診断された。

放射線との因果関係の有無について、県の検討委員会は「現時点で放射線が原因とは考えにくい」との立場を取る。ただ、専門家の間で意見が

分かれており、県は今後も長期的に検査を継続し、関係性を調べる。

事故が与えるストレスなどに関する調査にも取り組む。甲状腺検査は14年

度から2巡目を実施し、昨年12月末までに145人が最終的に甲状腺がん